



草加八潮地域連携呼吸器研究会 (SYRC-R:シルク・アール)

事務局：草加八潮医師会

〒340-0018 草加市中央1-5-22
TEL 048-928-8760
FAX 048-924-7180

代表世話人・会計：高木 寛
(高木クリニック)

世話人：加藤 貴紀
(かとうファミリークリニック)
平田 大介
(草加八潮医師会学術担当理事・平田クリニック)
篠原 浩一
(八潮中央総合病院)

広報・編集：新 謙一
(草加内科呼吸ケアクリニック・前東京医科歯科大学臨床教授)

看護・介護部門世話人
花木 美穂子
(わーくわっく草加)
須鴨 義夫
(一正堂薬局第二支店)
神津 陽子
(訪問看護ステーションゆりの木)
高橋 克幸
(獨協医科大学越谷病院リハビリテーション部)
新 智美
(草加内科呼吸ケアクリニック)

監査・斉藤 清
(草加八潮医師会)

会報著作・製作：新 謙一

SYRC-Rは草加八潮の周辺地域からのご参加も歓迎致します

日本内科学会雑誌11月号の座談会で「社会的イベントがもたらす感染症診療の変貌について」地域医療の観点から新謙一がコメントさせていただきました



国内最大の医学会が日本内科学会です。今月11月の特集は「感染症：診断と治療の進歩」でした。この中で企画された座談会で、東日本大震災や新型インフルエンザに代表される社会的イベントがもたらす感染症診療の変貌をテーマに、国立国際医療研究センターの大曲貴夫先生の座長で櫻井滋先生（岩手医大）、谷口清州先生（三重大学/国立感染症研究所）、藤倉雄二先生（防衛医大）と共に草加内科呼吸ケアクリニックの新謙一が参加して意見交換をしました。この中で地域連携で診療するシステムを日頃から意識して構築することで大きな変化にも対応することができる医療環境が育まれること、それは地域医療のカリスマ、若月俊一先生が長野で戦後の混乱期に実践した先例があることを紹介し、それぞれの立場で全体最適を考えた医療を展開することで対応できるはずであると強調させていただきました（今回、別刷りを同封させていただきました）。

編集後記：地域連携の必要性を本気で考えている人は皆同じようなことを言って現状に強い危機感を抱いています。昭和の栄光も輝きを失い、昭和の遺産を食いつぶして、今社会は大きな変革を求められています。医療・介護の分野は公的な制度に守られて、厳しいながらもまだ昭和の経営モデルを色濃く残しています。しかし医療介護資源の不足や偏在で今や歪がますます大きくなり、問題を先送りすることで後世への負担をますます増大させています。優秀な方が多い官僚や学識経験者で議論の遡上に上ったテーマは実現性の大小には関わらず重要な事が含まれています。しかし「お上」が考えている事が丸々おいしい食事として私たちの口に入ってくることはないのが現実です。「天は自ら助くる者を助く」、現場を知るからこそ私たちは協力して解決する知恵が生まれます。患者さんをご家族の笑顔の為に、私達自身が時代に合わせて変化して、良いサービス提供者になるよう諦めないで努力していきましょう。きっと宝石の様にキラッと輝く瞬間に出会えるはずです（謙）。

シルク・アール：質の高い滑らかな地域連携に！

草加八潮地域連携呼吸器研究会（英名：Soka-Yashio Regional Conference of Respiratory Disease）は頭文字をとりSYRC-Rと表記し、「シルク・アール」と発音します。絹（シルク）の様に質の高い滑らかな連携がある（アール）ことを目指しての語呂合わせのネーミングです。名前負けしないように継続発展させていきたいと考えています。皆様のご理解とご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

草加八潮地域連携呼吸器研究会（SYRC-R）

お互いの顔が見える地域連携に

患者さんを中心に多職種間の情報共有サイボウズLiveを実際に活用してみた!!

サイボウズLiveを用いた高崎での連携実績



阿部博樹(ひろき)先生
こやぎ内科（高崎市）
臨床工学技士
在宅人工呼吸器管理の
スペシャリストとして
各地での講演もこなす
第21回日本呼吸ケアリハビリテーション
学会優秀演題賞受賞
写真は今年11月の日本呼吸ケアリハビリ
テーション学会（福井）での1コマ

テから参照することが容易になりました。同一施設内での顔を合わせたの打ち合わせも簡単です。在宅医療での情報共有は連絡ノート、電話、電子メールと多岐にわたります。連絡ノートは自宅に行かないと内容が分かりません。電話では、多人数に同じ内容を何度も伝える必要があります。電子メールでは、個人情報を送信・受信者双方でパソコンに残る可能性があります。連携する医療施設間の距離が遠いとともに集まっの打ち合わせは困難を極めます。効率の良い情報共有手段が必要となります。

チーム医療という言葉をよく耳にするようになってから、数年が経過しました。医療システムは絶えず変化する患者が多様化するなか、「チーム医療」も進化し続ける必要があると考えています。チーム医療には患者情報の共有が必須であり、在宅医療の場合には多施設・多職種の情報共有が課題となります。院内単独での情報共有は電子カルテを主体とする電子媒体の普及により患者情報をカル

NPPV+HOT装着COPD患者の医療連携：

サイボウズLiveを使った情報連携（草加の実例紹介）

新智美(草加内科呼吸ケアクリニック)、閑野恵子(居宅介護支援事業所さんわ)、雪田きよみ(訪看STかしの木)、山崎あすか(くりの木薬局)、芳澤正士(マミー薬局)



Eメールで情報共有は、不便ではありませんか？

無料のサイボウズLiveで
チームの情報共有をスムーズに。

クリックでスタート！

FacebookやTwitterのアカウントで
すぐにスタートできます。

f Facebookで利用開始する

Twitterで利用開始する

¥0 Free File Task Discussion Calendar

目次：

サイボウズLiveを実際に活用
してみた!! p1

症例検討：サイボウズLiveを
用いた高崎での連携実例
こやぎ内科 p1
阿部博樹先生

講演1：新しい地域密着型中
小病院をめざして p2
東埼玉総合病院 院長
三島 秀康先生

講演2：地域医療ネットワー
クシステム「とねっと」の目
指すところ p3
東埼玉総合病院 地域糖尿病
センター長 中野 智紀先生

パネルディスカッション p3

日本内科学会雑誌11月号の座
談会に新謙一が参加しました p4

